

嫌われ者のお気に入り

先客がいた。

クジンシーは眉を擡めた。お気に入り場所は、誰も来ないからこそのお気に入りなのに。

薄暗く、湿っぽく、陰気さが心地よい。

七英雄は短命種もの前では威圧するため魔物の姿をしていた。ことにクジンシーはそうだった。自分の姿を見て怯える人間どもを見るのは気持ちいい。

しかし、まだ自分が魔物になる前の姿に戻りたい時もあった。嫌われてはいたけれど、皆と同じ姿——本来の自分の姿に。それができるのは、以前に彼が見つけたこの場所だけだった。いかにも危険そうな洞窟には、強欲な人間ども来ない。たまに迷い込む魔物も、クジンシーが睨めばこそそこそと出て行ってしまう。ここだけは、誰も来ない。

俺の邪魔をする者は、いないはずなのに。

クジンシーがいつもいる場所に、人の形をした者が座っていた。人間が酒を呑む、酒場と言われている場所で歌を歌っている吟遊詩人だとわかった。くたびれた深い緑のマントとさらした麻の色のままの長衣、衣類と合わせたような色あいの奇妙な形の帽子。クジンシーもよく見知っていた。

マントを地面に引いて、岩の上に座っている。膝の上に、布に包んだなにかを置いていた。

「なんだお前。なぜここにいる」

いつも尖っている声がさらに険しくなる。

吟遊詩人はクジンシーの方を見た。身じろぎしたはずみに、膝の上の包みが少し解けた。鈍い黄色い光がのぞく。

真鍮だろうか、とクジンシーはぼんやりと考えた。そんなことより、なぜ自分だけの場所に他人がいることのほうが重要だ。

大きな帽子と、顔の下半分を覆っている布で表情は見えない。い。

「ここはいい場所ですね」

歌声しか聞いたことのない声があたりに響く。のびやかで耳に心地よい声だった。

「いい場所なものか。こんな暗くてじめじめしたところ……」

なんとなく毒気を抜かれて、出て行けと怒鳴りそびれた。

「でも、一人になるにはいいところです」

「ああ、そうだよ」

大股に吟遊詩人の方へ歩み寄った。

「だからお前は邪魔なんだ」

ここは俺専用の場所だ。言外に滲ませたのに、吟遊詩人は気づかないようだった。あるいは、気づかないふりをしたのかも知れない。

「少しだけ、ご一緒させてくださいませんか。わたしもたまには静かに過ごしたいのです」

「静かな場所は他にもあるだろうが」

「そうですね——」

吟遊詩人はゆっくりとうなずいた。

「でもここに来たおかげであなたの本当の姿を見ることができました」

吟遊詩人は立ち上がった。帽子の影から、色もわからない

ほど薄い瞳が覗いた。

「本来の姿にもどっているのに、なぜ仮面で隠すのですか？」

「大きなお世話だ」

仮面に触れようとする手を払いのけた。乾いた音が、思っ
たより大きくあたりに響く。

狼狽した。そんなに強く拒絶するつもりはなかった。

だから、俺は嫌われるんだ。せつかく俺に近づいてくれたのに、痛い思いをさせてしまった。

吟遊詩人は片手を押さえてこちらを見ている。どんな表情かは帽子の影で見えない。

ああ、どうせ俺は嫌われ者だ。だから、乱暴してもいいんだよ。

突然自暴自棄がクジンシーを襲った。自分の凶暴さにとまどうほど、荒々しい感情だった。

眼の前の男を押し倒した。

彼が抱えていた包みが地面に落ちた。金属が固いものにぶつかる音が響く。

落ちた楽器には眼もくれずに、吟遊詩人の肩を押さえつけた。奇妙な帽子が地面を転がる。眼から下を覆っている布を手荒に押し下げた。同時に光が癖のない髪に形を変えて広がる。

眩しい。

頭を振って光を追い出す。

隠すものを失った顔は、冷たいくらい整っているのに眼を瞠る。

こんな顔をしていたのか、この男は。

長命種すら、超越しているように思えた。美しいだけではない、冷めたような、それでいてなにかを負っているかのような瞳の光。

身体の奥に熱い痛みが走った。

抱いたら、こいつはどんな顔をするだろう。

ひさしぶりの欲求だった。自覚するともう矢も盾もたまらない。

長衣の裾から手を差し入れ、素肌を探す。

吟遊詩人は動かない。ひんやりした肌に、かえって自分の体温が上がる気がした。

楽器しか持たないであろう身体は細かった。戦いを重ねて、命を奪い続けて、魔物すら吸収し続けた自分には華奢すぎる。

だから、奪うのは簡単だ。俺の場所に入りこんだのだから、俺にはそうする権利がある。

脚衣を下げようとしたが、うまくいかない。

腰帯が邪魔だ。

自分の腰に差した短剣を抜いた。硬い光が反射する。組み敷いた身体がわずかに強張った。